

ロシア領トルキスタンにおける中国籍アクサカル Chinese Aqsqals in Russian Turkistan

デヴィッド・ブローフィー (David Brophy)

清朝治下の新疆（中国領トルキスタン）におけるコーカンドのアクサカル Aqsqal（原義は「白いヒゲ」、通常は「長老、リーダー」を意味する）については、従来の研究においてしばしば論及されている。しかし、ロシア領（のちにソ連領）トルキスタンにおける新疆出身テュルク系ムスリム社会に存在した、中国（中華民国）籍のアクサカルについては、ほとんど知られていない。本報告では、中露双方の辺境統治に関わる史料を利用して、このアクサカルの位相とその変化を外交史と社会史の側面から検討した。なお、本報告における“Chinese”の語は、「中国国籍（を持つ者）」の意味で用いた。

清代新疆におけるコーカンドのアクサカルは、1834年、カシュガルに初めて設置された。それは、東方貿易の独占を企図するコーカンドのハーンによって任命され、新疆在住のコーカンド商人からの徴税を担っていた。しかし、このコーカンドのアクサカルは、コーカンドがロシアに占領されるに及んで廃止された。その後、ロシアが新疆と国境を接し、両者間の直接的な貿易が開始されると、新疆各都市にロシア国籍を持つアクサカルが設置された。ただし、この新たなアクサカルは現地における下級役人でしかなく、コーカンドのアクサカルとは性格を異にしていた。

ロシア統治下のトルキスタンの経済成長は、清朝末期から民国初期にかけて、商人や出稼ぎ労働者を中心とする中国籍カシュガル人の移住者を多く生んだ。またこの時代は、中国においても「国籍」の概念が導入され、中国当局が「国籍問題」に対して高い関心を払うようになった時期にあたる。このような状況において新疆省政府は、ロシア領トルキスタン在住のカシュガル人社会を監督するため、中央アジア起源のアクサカル制度を採用した。1914年夏、カシュガルにおいてアクサカルを選出し、ロシア領トルキスタン各都市（タシケント、オシュ、アンディジャン、コーカンドなど）に派遣した。彼らは、現地ロシア当局の認可を受けた上で、中国籍を持つムスリム商人や住民の保護にあたった。行政的な認知を受けたアクサカル制度は、様々な問題点を抱えていたものの、カシュガル人と新疆省政府との間にそれまでにない緊密な紐帯を生んだといえる。

しかし一方で、この中国籍アクサカルは、この時代に新たに設立された革命組織、そしてソビエト政権から、一つの障害と見なされるようになった。1917年8月、ソ連在住の中国人労働者の福利厚生や帰国支援をおこなう労働組合「中華旅俄聯合会」が、サンクトペテルブルグにおいて設立された。この労働組合は、1918年12月に「旅俄華工聯合会」へと改名し、1920年4月にはトルキスタンにも支部が設立された。また同じ頃、「旅俄華工聯合会」と同様の目的を持った労働組合が、カシュガル商人グループの手によってアンディジャン、コーカンド、オシュなどで組織された。しかし新疆省政府は、これら労働者組合を既存のアクサカル制度と相容れないものと見なし、ソビエト政府に対してもそれら組合には通商交渉をおこなう権利がないことを通達した。他方、次第に共産主義団体の色彩を強めていった労働者組合側からも、中国籍アクサカルの存在は組合活動の主要な障害と見なされるようになり、さらに社会改革を推し進めるソビエト政府の標的にもなった。ただし、ソビエト政府にとって中国当局を「懐柔」するという実用的な側面も存在したため、中国籍アクサカルは1920年代終わりまでその地位を保ち続けることになる。

本報告では、ロシア領トルキスタンにおける中国籍アクサカルの存在に焦点を当て、その位置付けや役割が「国籍問題」の中でどのように変化したのかを論じた。新疆のテュルク系ムスリムを「華僑」社会の一部として検討することに議論の余地はあろうが、「国籍問題」からのアプローチは、もはや陳腐さすら覚える「ウイグル・アイデンティティ」という問題に対して、新たな視座をいくつか提供できたと考える。

(ハーバード大学博士候補生)